

令和3年9月13日

立田幼稚園

立田幼稚園 令和2年度自己評価の報告

1. はじめに

令和2年度は、新年度がスタートした途端に「登園自粛」を要請するという非常事態となり、新型コロナウイルス感染症対策と幼稚園教育をどのようにしたら両立させられるか模索しながら進んだ一年であった。そのため、自己評価の重点項目は『新型コロナウイルス感染症対策を考慮した新しい保育様式を実践する。』と設定した。

年度スタートと同時に始まり約2か月に及んだ「登園自粛」は子どもの集団生活の場を奪い、保護者の不安や負担も大きかった。この時期はマスクや消毒液さえ手に入れることが難しく、教職員の不安も非常に強かった。ほぼ全員が揃ってスタートできたのは6月であったが、園児も教職員も「少しでも具合が悪ければ登園・出勤しない。」を徹底するしかない状態。その後、徐々に衛生備品を調達できるようにはなったが、ワクチンが無い中、夏の第2波、冬の第3波を何とか乗り越えてきた。

溢れるほどある情報の中から適切で有効な対策を探るが正解が分からず、これならばと思って実践したことがしばらくすると否定されることもある等、実践しながら修正するの繰り返しであった。その中で一番有効だった対策は「少しでも体調が悪ければ登園・出勤しない。」ということである。このことについて多くの保護者の理解と協力を得られたことで園にウイルスが持ち込まれる可能性が下がり、教師の安心につながった。

登園自粛により活動量は例年と比べて少なく、クッキング保育や鍵盤ハーモニカ等、いくつか見合わせた活動もあったが、教師は「この状況でどこまで出来るか？何が出来るか？」を常に考え、できる限りの活動を実践してきた。それにより、子ども達は様々な経験をし、それぞれに大きく成長したことを実感できた。

保護者の観覧を伴う行事は、密集を避けるために分割・分散して実施、参観を中止して子どもだけで実施した他、行事自体を中止したものもあった。保護者が来園する機会が減り、園での子ども様子が見えにくい状況であったため、少しでも園生活が伝わるよう保育動画の配信も行った。

混雑を避けた行事の運営の仕方や動画の配信などは保護者にも良い評価をいただき、教師も手ごたえを感じる事ができた。しかし、これまでの保育の当たり前を一つひとつ見直した日々は教師の負担を大きくし、未知のウイルスへの不安と合わさって、全体的に苦しかったことが自己評価に現れていた。

令和3年度はウイルスと戦いながらの保育も2年目となる。昨年度の対策や評価を活かすことで少しはスムーズに運営をすることができるし、ワクチン接種も進んできた。明るい兆しが見えてきたと思っていたところでの9月の1か月の登園自粛要請に、再び子どもにも保護者にも教職員にも不安と負担が広がっているところである。園児自身はワクチンを接種できず、流行中のデルタ株は子どもにも移りやすい。「少しでも具合が悪ければ登園・出勤しない。」を徹底し、感染リスクを下げる工夫をしながら、

慎重に進んでいくしかない。

幼稚園に登園することもできなかつたり、感染症対策のため禁止されることも多くなつたりして、子どもらしく過ごすことが難しい子ども達には、幼稚園に登園した時はのびのびと過ごし熱中することを見つけてほしい。そこで、令和3年度の自己評価の重点項目を『幼稚園生活の中で一人ひとりが好きなあそび・好きなことを見つける。』と設定した。当たり前のことのようにだが、コロナ禍では教師がこのことをしっかりと意識して、保育を計画していきたい。

2. 自己評価結果のまとめ

令和2年度の自己評価結果について、学校法人立田学年の理事会（令和3年5月28日）実施にて報告を行った。その内容を以下のシートにまとめて公開する。

教師の評価の重点項目は『新型コロナウイルス感染症対策を考慮した新しい保育様式を実践する。』であったが、この他に、立田幼稚園の教師として必要な基本的事項についても評価を実施した。

評価分野	自己分析
1. 教育の在り方・ 教育計画	<ul style="list-style-type: none">・これまで、遊びを中心とした偏りのない教育計画を立ててきたが、令和2年度は新型コロナウイルス感染症対策無くしては何も実践できなかったため、従来の保育を一つひとつ見直し、出来得る教育活動を最大限に計画した。従来とは違う形で行事等を実施することになったが、新たな取り組みは保護者からも評価していただいた。・保護者や教師に、園の教育理念や教育方針が十分に理解されているとは言いきれず、教育課程の明文化が課題となっているが、ここ数年の度重なる制度改革への対応と新型コロナウイルスへの対応で先送りになっている。
2. 保育の実施と 指導	<ul style="list-style-type: none">・年間を通して新型コロナウイルス対策のために思うようにできないことも多くあったが、できるだけ園児が豊かな経験を重ねることができるよう、様々な工夫をして教育活動を実施した。・子どもの様子をよく観たり心情を丁寧に読み取ったりして、一人ひとりの発達段階や特性にあった指導を心掛けている。発達支援児が在籍しているため、担任教師をサポートする補助教諭を配置しているが、活動によってはそれでも教師の数が足りないと感じる場面もあった。・全園児を全教職員が共通理解するように心がけてきたが、新型コロナウイルス対策のため、教師間で話す時間が減少しており、例年よりは全園児を理解することは難しく感じた。

<p>3. 地域・家庭との 連携と支援</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との連絡を密にし、一人ひとりの園児に細やかな対応をしている。 ・必要な場合は、感染症対策をした上で、保護者や支援機関との関係者会議や、支援機関からの参観を実施し、発達支援児の指導についての連携を図った。 ・新型コロナウイルスが心配されるため、地域の小中学校と連携した活動はほぼ中止となった中、感染状況が落ち着いている時期に、近隣小学校の支援クラスの子ども達と年長児との交流活動に、新たに取り組むことができた。 ・8月からは未就園児体験保育を実施した。密を避けるために、回数を増やして一回ごとの参加者数を減らした。コロナ禍で児童館や公園に行く機会も減っている親子にとって、安心して遊び、保護者の交流ができる場を提供できた。
<p>4. 安全・衛生 管理</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・新型コロナウイルス陽性者の濃厚接触者となった場合や PCR 検査を受ける場合の対応を繰り返し示し、園内での蔓延防止への協力を依頼した。園児も教職員も「体調が悪ければ休む。」を徹底している。 ・年度当初は、マスクも消毒液も手に入らず、感染の不安とたたかいながらの開園で、教職員は疲弊した。徐々に衛生用品が揃うようになったが、消毒について、使用の頻度や使用の範囲について試行錯誤した。行政から指針が示されてからはそれに従って実施しているが、消毒よりも「体調が悪ければ休む」ことと「こまめな手洗い」が有効であると考え、そちらを徹底している。幸い、令和2年度は園児と教職員の感染はなく、その他の感染症もほとんど無かった。 ・防災訓練は、実際に災害が発生した時に本当に実践できる内容であるかを考えて計画し、実施後の反省を次の訓練に盛り込んでいる。また、避難時にサポートを要する園児の情報を全ての教師が把握し、クラスを越えて援助できるように情報を共有している。災害発生時の行動を園児自身でも判断できるよう、避難ルートを表示したり、身を守るポーズの写真を掲示したりしている。
<p>5. 人事管理・ 労務管理</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・保育内容及び発達支援の質の向上を図るため、教職に関する人材が多数を占めている。相互の連携が有効に機能するような人事管理も工面したい。 ・子ども子育て支援新制度の処遇改善加算Ⅰを活用して賃金改善を行っている。更に、令和3年度は、教師のキャリアアップに応じて処遇改善Ⅱ加算を取得・配分し、教職員の「資質向上」「やり甲斐」につなげたい。
<p>6. 財務管理と 法人管理</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・特定教育・保育施設の確認を受け、新制度の中で市町村の財政支援を受けている。更に幼児教育・保育の無償化の対象施設にもなり、収入の大半は公的資金となった。園児数そのまま収入に反映されることとなり、園児の確保が課題となっている。 ・今後は補助活動収支や、委託販売収支のバランスにも力を注ぎたい。